

文化財でまちを元気に―地元学・まるごと博物館という考え方―

須藤 茂樹

【論文概要】 地域に残された有形無形の文化財を地域住民みずから掘り起こし、地域活性化につながるひとつの考え方として、エコミュージアム、まるごと博物館について検討を加えた。徳島県南部の美波町日和佐地域を事例に具体的に提言をおこなった。

【キーワード】 文化財 地元学 エコミュージアム まるごと博物館 日和佐 地域 住民

はじめに 地域を豊かにする手段としての「まるごと博物館」

人生八〇年時代となり、生涯学習という言葉が定着した現在、教育機関としての博物館の役割が多様化し、その社会に果たす役割への期待が増大している。

近年では、博物館を核にすることにより、地域の経済を活性化させることができるという視点から、塚原正彦、デビット・アンダーソン著 土井利彦訳『ミュージアム富国論 英国に学ぶ「知」の産業革命』（日本地域社会研究所 二〇〇〇年四月）、塚原正彦『増補改訂版 ミュージアム集客・経営戦略』（日本地域社会研究所 二〇〇四年一月）などの研究成果が発表されている。

塚原氏は、英国の博物館に学び、ミュージアム産業の可能性を指摘し、ミュージアムは地域経済の救世主になると断言する。知と夢を売る施設であり、「ものを見せる場」から「学習の場へ」と方向性を示し、エコミュージアムなどの視点からミュージアムの可能性について論じている。日本のミュージアム産業の事例として、夕日のミュージアムや美山町かやぶきの

里をあげている。「ものを見せる」から「学習の場へ」、何度も行ってみたくなる演出、利用者に満足度を付与する、博物館を活用するミュージアム・マネージメントなどについて解説している。

博物館に身を置いたことのある私も博物館の持つ「チカラ」や可能性を信じたがいし、塚原氏の見解に魅力を感じ、また目指す方向のひとつとして考慮する必要があるものの、日本の博物館の発展過程を考えると、博物館で経済を活性化させるのは現状では困難であるし、教育機関と位置付ける日本における博物館の使命を考えると、経済面にのみ傾斜する発想には危惧を覚えるところである。やはり、博物館は教育的機能をこそ第一義に考えていかなければならないと思っている。その先に、結果的に地域が活性化し、経済的に潤うのであれば、それに越したことはないと考えている。

本報告では、いわゆる従来の博物館とは違うエコミュージアムの視点に立ち、長野県松本市をはじめ近年諸所で設立、あるいは検討されている「まるごと博物館」について、美波町日和佐を事例にその可能性を検討し、試論として自分なりの提言を試みたいと思う。

一 博物館とは

博物館に関しては、さまざまな概説書にその定義について記載されているので、詳細はそれらに譲りたいが、「博物館法」(昭和二十六年「一九五一」二月施行)の定義を参考までに掲げておく。

博物館とは、「博物館法」第二条によれば、「博物館は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む、以下同じ)し、展示し、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(社会教育法による公民館及び図書館法による図書館(昭和五十五年法律)を除くのうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人(独立行政法人)(独立行政法人通則法(平成十一年法律第百三十三号)第二条第一項に規定する独立行政法人をいう。第二十九条に同じ)。を除く)が設置するもので次章の規定による登録を受けたもの。」である。また、同法は、博物館は上記目的を達成するために「実物、標本、模型文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、および展示すること」をはじめ十一項目の役割を挙げているが、ここでは詳細には言及しない。博物館は事業を行うに当たって土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない、としている(第三条二)。

博物館関係者の間では、従来も同様の視点で論じられてきたが、博物館に二〇年以上勤務し、いままた大学で博物館学を講じている筆者にとって、博物館の機能について次のように考えている。

詳しくは別の機会に論じたいし、研究の過程で多少変動することもあり得るが、一応いえることを述べておきたい。

資料集収・保存、調査研究、展示公開、教育普及の博物館の機能を基礎

として、博物館には、経済的豊かさには直結しないかもしれないが、①教養を豊かにする、②ここを豊かにする、そして③博物館には癒し効果がある、と考えている。博物館は「もの」、いわゆる資料を根幹として、学芸員等博物館職員という「ひと」が来館者である市民・観光客といった「ひと」に展示やレファレンスを通じてアクションする機関であるが、ひとびとがさまざまなことを学び、感動する、さらには「ひと」が活動する「場」でもある。さらに、「ひと」が「癒し」を得る場でもあると考えている。

大堀哲氏は、「一回の利用者を生涯にわたってのミュージアムのファンにするためにはどうすべきか」といった利用者満足のためにミュージアムを経営するということは、ほとんど想定されてこなかった」(「序にかえて」塚原正彦『増補改訂版 ミュージアム集客・経営戦略』所収)とする。たしかに、数十年前の博物館のなかには、そのような傾向の館が存在したと思うが、近年では如何に入館者を増やすか、リピーターを獲得するかを真剣に模索している博物館も少なくないと考ええる。

二 地域博物館の使命

博物館の社会に果たす役割は館種によって相違する。国立、公立、私立など設置主体の違い、歴史、自然、企業など扱う対象などの違いなどである。県立や市立、町立、村立といった自治体が設置する博物館は、大小はあるものの、対象が「地域」ということになる。扱う資料「もの」、主たる来館者として想定される「ひと」もまず「地域」が想起されなければならない。

(1) 「地域」とは

まず、「地域」という言葉である。実はこのことばの捉え方は難しい。

一般的には、行政単位としての「地域」を思い浮かべると思うが、生活圈

としての「地域」もあるし、目的や使命、住む人々の考え方によってもさまざまである。

本稿では、美波町の旧日和佐町を対象として考えてみたい。

(2) 地域博物館の使命

つぎに、地域博物館の使命とはなにかを考える。地域に関わる博物館資料を収集、保管し、保存を考慮しつつ、調査研究を進め、展示公開や講演・解説・イベントといった教育普及活動を通じて、町民や観光客など内外の多くの方々に地域の歴史・文化・自然などを知ってもらうことを使命とする。そして、地域博物館はそのまちの魅力を発信していくのである。

博物館施設を持たない自治体もまだまだ存在する。それでは、博物館施設がないとまちの魅力を発信することはできないのであろうか。そのようなことは断じてない。公民館や図書館の一室やロビーを展示空間に模様替えをすることはできるし、役所の庁舎内の一室やロビーを活用することもできる。要はそれをやろうとする職員がいるかどうかである。

そこで、ここではもうひとつの博物館ともいえる「地域」を博物館としてとらえるエコミュージアム、すなわち「まると博物館」という考え方を紹介してみたい。

三 エコミュージアムの思想

(1) エコミュージアムとは

エコミュージアムの発祥はフランスで、フランス語の「エコミュゼ」を英訳したものが「エコミュージアム」である。

エコミュージアム (Ecomuseum) は、エコロジー (生態学) とミュージアム (博物館) をつなぎ合わせた造語で、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で継承されてきた自然や歴史、文化、生活様

式を含めた環境を、総体として持続的手法をもって永続的に研究・保存・展示公開・活用を図っていくという考え方であり、その実践そのものである。

エコミュージアムは、展示資料を現地保存し、住民が参加して主体的に運営に参加するもので、地域を見つめ直し、その発展を目指すことに大きな特徴がある。

エコミュージアムは、必ずしも博物館として明確な形態があるわけではなく、さまざまなタイプのものが存在する、あるいは存在してもよいのである。

日本ではいまだ耳慣れない用語であるが、エコミュージアムの歴史は案外と古い。

一九六〇年代後半に、国際博物館会議 (ICOM) の初代ディレクターであった G・H・リヴィエルがその概念を提唱し、尽力したもので、「エコミュージアム」の英語訳はユグ・ド・ヴァーリンが考案したものである。そして、一八七一年の第九回国際博物館会議の席上で公に発表され、その後世界に紹介されて各地でその地域に応じた展開を見せている。

(2) 日本におけるエコミュージアムの展開

日本では、一九八〇年代になって、エコミュージアムの思想が積極的に導入されるようになった。日本にエコミュージアムを紹介した新井重三は、エコミュージアムについて、次のように定義している。

「地域社会の人々の生活と、その自然環境・社会環境の発展過程を史的に研究し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを図って、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする新しい理念を持った博物館である」

エコミュージアムにはさまざまな「かたち」があるのは前述の通りであるが、日本では次のような「かたち」が一般的なパターン、モデルとなっ

ている。

エコミュージアムの構成要素は、地域の概要を紹介する拠点施設となる「コア」、それぞれの現地で保存されている展示対象となる「サテライト」、コアとサテライト、あるいはサテライト相互をつなぎ、地域の魅力再発見へと導く「ディスカバリー・トレイル」（発見の小径）などからなる。これらでつなぎ、構成される地域全体が資源となるというものである。

高価な美術品を対象とするのではなく、ありきたりのもの、地域そのものの、このなかには、いまは残っていない記憶として残る文化遺産も入る、これらを、いわゆる博物館施設に移すのではなく、その地（現場）で保管し、専門職としての学芸員ではなく、地域で生活する住民ひとりひとりが学芸員となって、それぞれのサテライトをつなぎ、地域にやってくる人々をとともに迎え、解説し、サービスを施すものである。主体があくまでも地域であり、そこにくらす地域住民である、という点が最大の特徴である。

その地域の住民たちが、いまある現在を過去のような経過を経て形成されてきたのかを調べ学び、理解し、それを他の地域の人々に公開し、理解を得る、そして未来に正しく受け継いでいく、ここに意義があるのである。

こうした一連の取り組みが結果、地域の活性化、地域振興、地域経済の発展に貢献することもまたエコミュージアムの目的のひとつでもある。

日本ではすぐに「地域活性化の切り札となる」として、エコミュージアム、まるごと博物館が注目されがちであるが、実際の成功例は必ずしも多いとは言えない。

エコミュージアム、まるごと博物館が、すぐに「人が来る」とか「お金が儲かる」といった結果に通じるものではないのである。現状のグローバル経済において、利潤追求、資金獲得などといったものなどに多くの困難な状況が伴うのである。

しかし、それでもエコミュージアムの理念をしっかりと理解し、従来の日本における博物館の発展過程を認識し、わが国で育まれた「博物館学」を

上手に援用しながら、日本に即応した日本型のエコミュージアム、まるごと博物館を模索していけば、それなりの成果があるのではないかと私は考えている（補注）。

しかし、そのためには従来の博物館や学芸員の思考を変えらるるとともに、まるごと博物館の核となる地域の住民（市民学芸員）の意識、それをサポートする役所の考え方も変えていかなければならないと考える。また、地域によっては、エコミュージアムが展示業者主導によって計画立案、推進がなされているところも少なくなく、設立後、あるいはその過程において、必ずしも円滑にいつていないところもあるようである。このあたりに、意識改革が必要ではないかと考えるところである。それができれば、必ず新たな「かたち」の博物館としての「まるごと博物館」が出来るが、また地域活性化の起爆剤となる可能性を十分に秘めていると考えている。

四 日和佐には豊かな文化財がたくさんある

(1) 「文化財」とは何か

文化財というと、すぐに「国宝」や「重要文化財」、「天然記念物」、「史跡」などという言葉を想起することだろう。狭義の意味ではその通りであるが、ひろく人間や自然がつくりだした後世に残しておきたい価値ある文化物、それが文化財である、としておこう。

(2) 日和佐の文化財 新たな魅力発見を

日和佐には、四国八十八ヶ所霊場第二三番札所薬王寺、うみがめの上陸産卵地である大浜海岸など、すでに知られた魅力的な文化財が数多くある（写真1・2・3）。しかし、日和佐にはあまり知られていない、あるいは知られていても十分に認識され活用されていない文化財が多数ある。これらを発掘し、調査し、そしてその魅力を発見しなければならぬ。

四国大学文学部日本文学科の授業の一環として、学生たちと毎年葉王寺の文化財調査を行っているが、佐竹藍川筆の襖絵や「日和佐八景詩屏風」などの文化財を新たに紹介することができた(写真4・5・6)。また、日和佐のまちを散策していると、風情のある古民家が残されており(写真7)、活用の案が頭に浮かんでくるのである。



写真3 葉王寺 仁王門



写真1 大浜海岸 うみがめ上陸地



写真4 2013年の調査



写真2 日和佐うみがめ博物館

文化財でまちを元気に―地元学・まるごと博物館という考え方―



写真7 古民家 日和佐



写真5 葉王寺 佐竹藍川筆襖絵



写真6 日和佐八景詩屏風

(3) 文化財を有機的に結びつける

発見した文化財の魅力を発信することも大切であるが、それらを有機的に結びつけることによって新たな魅力が見つかるのである。あるいは連携することによって、さまざまなことが学べたりするのである。

例えば、前述のように古民家が点在しており、すでに古民家カフェや休

憩所的なスペースとして活用されているが、あくまで単体として活動されている。これを結びつけることによって、新たな魅力が生まれるのではないかと考えるのである。例えば、役割分担をして活動を展開する、あるいはひとつの物語やコンセプトをつくり、それをベースとして相互補完的に連携して活動をする、といったことである。

五 美波町へのひとつの提言―日和佐まるごと博物館構想・博物館の可能性―

学生たちとともにおこなってきた四年間の調査活動の成果を踏まえ、また日本におけるエコミュージアム、まるごと博物館の動向を鑑みて、試みに「日和佐まるごと博物館」構想を提示してみたい。あくまで、参考程度とお考えいただければと思う。ただし、美波町に限らず、他の地域でも参考になるのではないかと考える。

まず、日和佐の生活文化の特質を考えると、ここから始めなければならぬ。「アカウミガメの上陸地」「遍路文化」「まちのくらし」「うみのくらし」「やまのくらし」の五つを上げてみた。これを「日和佐まるごと博物館」の構成要素と考える(図1)。

ついで、これら五要素にかかわる文化財や機関など「もの」・「場」・「ひと」を選び、関連性を概念図に表したものが図2「まるごと博物館文化財の現地保存と活用」(歴史・美術・自然・伝説・伝承)である。

コア施設として、美波町の歴史・民俗資料を収集・保管・展示している美波町立日和佐図書・資料館、観光客の相談にのる美波町観光協会や地元の物産を販売している施設が入る道の駅を位置付ける。ここで、日和佐の歴史や文化、自然に関する簡単なガイダンスやアドバイスを受ける、あるいはさまざまな質問や問い合わせに応じるレファレンス機能も持たせる。もちろん、苦情や意見なども受け付け、今後の対応や活動に活かすことが



図1

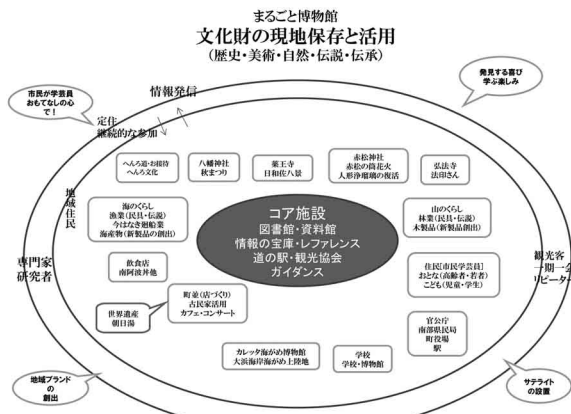


図2

大切である。

文化財としては、二三番札所で有名な薬王寺や秋祭りで賑わう日和佐八幡神社、筒花火の赤松神社、海がめ上陸地として知られる大浜海岸とその学習施設であるうみがめ博物館カレッタ、「弘法さん」の伝説が残されている弘法寺などが思い浮かぶ。そして、そこにお遍路さん、お接待、へんろ道などのへんろ文化、海のくらし、やまのくらし、そしてまちのくらしが重なり合うのである。美波町の日和佐地区は海あり、山あり、町ありと多彩な「顔」を持つ地域である。そこには、漁業、林業、商業（廻船業）などさまざまな産業が開き、いきいきとしたひとびとが暮らしてきたのである。

ほかにも、日和佐のまちには、世間遺産・朝日湯や店づくりの古民家などがある。すでに、古民家カフェや南阿波井がつくられており、地域ブランドの創出は始まっているようである。各分野の専門の研究者をはじめ学校、官公庁の協力が必要なことはもちろんではあるが、なんとといってもここにくらす地元住民たちが協力ではなく、主体的に動いていかなければエコミュージアム、まるごと博物館はできないし、長く継続して運営し続けることもできないのである。さまざまな施設や店舗などをサテライトと位置づけ、これらに関係するひとだけでなく、「住民が主役」「住民ひとりととりが説明役」あるいは「住民が学芸員」といった共通認識をもって、そして「自分たちが地域をよくするんだ」という思いで責任をもって係わりをもっていくことが重要であると考ええる。

そこで重視されるのが、来るひと、迎えるひとにとって、「発見する喜び、学ぶ楽しみ」が常にあるかということである。来る人にとって一回来たら十分と思われたらリピーターにはなり得ない。迎えるひとにとってもこの「発見する喜び、学ぶ楽しみ」がなければ継続して来るひとを新鮮な気持ちで迎えることができないし、長く続けることができないのである。

「一期一会」を大切に、「おもてなしのこころ」で対応することが重要

文化財でまちを元気に―地元学・まるごと博物館という考え方―

であろう。

多くのひとに来てもらうためには情報発信が不可欠である。その方法は従来とは違い、ホームページやSNSなど多様化しており、いくらでも発信することは可能となっている。それではなにか大切かといえば、発信できる魅力ある情報を発見し、「物語」をつくって継続的に発信し続けられるかということである。

それから、地域ブランドの創出も重要である。くらしから生まれたたべものや特産品をいかに発見、開発するかである。

この点をまとめたものが図3である。まず、「自分たちで地域を知る」、そして「発信する」、他の地域と交流する。そのことにより、「ツーリズム」

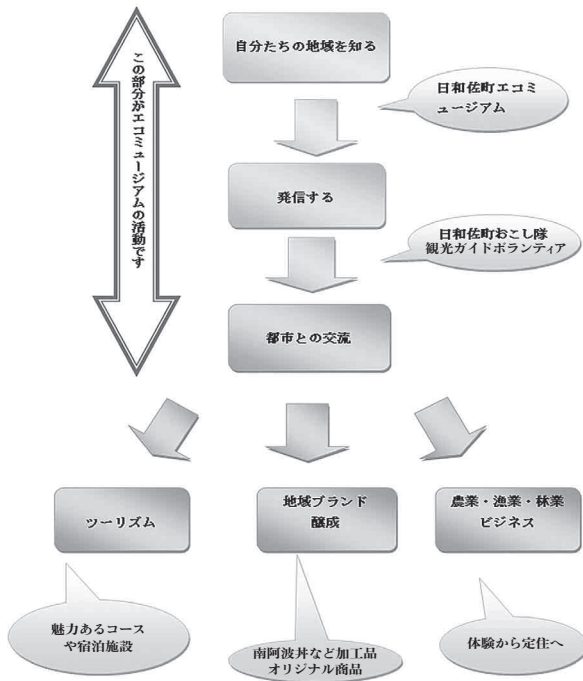


図3

「地域ブランド創出」「ビジネス」につなげていくのである。そのひとつのかたちが、「日和佐まるごと博物館」（エコミュージアム）である。そして、それを動かしていくのは、日和佐町おこし隊などといった地域にクラス住民たちなのである。

いずれにしても、そこにくらす地域のひとつとが、「地域に生きることの意義」を見つめ直さなければならぬ。改めて自分たちが住んでいる土地に刻まれた歴史や文化、自然に向かい合ってみてはどうだろうか。

おわりに ひとりひとりの問題として考えることが大事

試みに私案として、エコミュージアム、まるごと博物館の考え方に学び、「日和佐まるごと博物館」構想を提示してみた。

繰り返しになるが、地域（ここでは日和佐）には、まだまだ隠れた文化財はたくさん眠っているはずである。住民の手で発見し、そして活用して欲しい。「地域」を豊かにするには、住民ひとりひとりが自分の問題として考えることがなによりも大事である。

近年、地元の歴史や文化、自然を生活や日常という視点から見つめ直し、自分たちの力で町や村、地域を豊かにしていく、活性化していくという「地元学」という視点が注目されている。特に観光振興の面でも地域を活性化させる起爆剤になるのではないかと期待されている。安易に観光面に傾斜することに危惧を抱くものの、井口貢氏をはじめ経済学の立場からの興味深い指摘が多くみられ、傾聴に値するものと考ええる。

私も歴史学の「チカラ」を信じて、歴史学、文化財学という視点を重視した地域学、地元学としての「阿波学」の構築を目指している。その視点から日和佐を考えたのが本稿である。あくまでも、個人的な問題関心から私案を提示したものにすぎないことをお断わりして稿を閉じたい。

（補注）

まるごと博物館の参考となる事例として、視察した東京都青梅市の事例と開催に参与した徳島県板野郡藍住町の勝瑞フェスティバルの事例を紹介したい。

JR青梅駅を降りた青梅のまちは江戸時代の青梅宿として栄えたところである。地元の商工会により、映画の看板、赤塚不二夫、昭和レトロをキーワードに「まるごと博物館」的な展開をおこなっている。赤塚不二夫記念館は、「元氣な昭和 赤塚ワールド」と銘打って昭和を代表するまんが王赤塚不二夫の作品や写真を展示、赤塚ワールドを体感できる博物館である。また、昭和レトロ商品博物館は、「未来に残そう 商品パッケージは文化である」のコンセプトのもと昭和世代には懐かしいレトロな商品が所狭しと展示した施設である。また、昭和幻灯館は、「郷愁の鉄道コレクションワールド」として、コレクションを展示している。「ぶらり青梅宿・昭和を楽しむ三館めぐり」という共通観覧券を発売している。住江商店街振興組合が「昭和レトロな街なかグルメ&ガイドマップ青梅二〇一五・春」を発行してPRに努めていた。また、青梅産のネギを入れた「水餃子」など、地元食材を使ったグルメも魅力的であった（写真8・9・10・11・12）。

勝瑞フェスティバルは、二〇一三年一〇月二〇・二一日（土・日）に国史跡の勝瑞城館跡（徳島県板野郡藍住町勝瑞）を会場に、藍住町教育委員会主催で行われたものである。エコミュージアムではないが、地域住民が参加したという点で興味深い内容を含んでいるので紹介したい。

三好氏は戦国時代に畿内で活躍したことから、高槻市をはじめとする三好氏ゆかりの関西圏の市町村にブースを出してもらい、教育委員会は三好氏に関する遺物やパネルを展示し、観光協会や業者は特産物の紹介・販売をおこなった。また、学芸員や発掘担当者によりシンポジウムを行った。交流もさることながら、三好氏の歴史や文化を広域的に捉えることができ、



写真8 赤塚不二夫会館



写真9 バカ田神社…



写真12 地元食材で作った水餃子定食 500円！



写真10 昭和レトロ商品博物館



写真13 勝瑞館跡 枯山水庭園復元



写真11 青梅駅地下道 映画看板

三好氏の新たな魅力が発見できた。
また、鷹匠による放鷹の実演、三好実休の茶の湯を広める会による抹茶の接待、そして地域住民の集う郷土史研究サークルあいきよによる「三好記」に登場する風流踊りの復元実演、地元の料理屋吉野屋による十三代将軍足利義輝の三好義興邸御成時の接待料理の復元と「三好御膳」の提供など多彩な催しがフェスティバルに花を添えた（写真13・14・15）。特に、風流踊りの復元や戦国時代の大名料理の復元は住民の熱意と協力がなければできないことである。大名料理は現在でも吉野屋に予約すれば食すことができる。エコミュージアムを意識しておこなわれたわけではないが、藍住町にとって継続し得る目玉のひとつになると思えるのである。



写真14 実休茶の湯の会 勝瑞フェスタ



写真15 風流踊り復元 勝瑞フェスタ

【主要参考文献】

- 京都造形芸術大学編『地域学への招待』 角川学芸出版 二〇〇五年五月
 全国大学博物館学講座協議会西日本部会編『新時代の博物館学』 芙蓉書房出
 版 二〇一〇年三月。
 塚原正彦 デビット・アンダーソン著 土井利彦訳『ミュージアム富国論 英
 国に学ぶ「知」の産業革命』 日本地域社会研究所 二〇〇〇年四月。
 塚原正彦『ミュージアム集客・経営戦略』 コミュニティ・ブックス 日本地
 域社会研究所 二〇〇四年二月。
 須藤茂樹監修『平成二四年度「地域がキャンパス」推進事業 薬王寺文化財調
 査報告書 ふるさと再発見―薬王寺の書画撰― 「地域がキャンパス」推
 進協議会 二〇一三年三月。
 須藤茂樹監修『平成二六年度「地域がキャンパス」推進事業 薬王寺文化財調
 査報告書 ―薬王寺境内案内―石造文化財の魅力― 「地域がキャンパス」
 推進協議会 二〇一五年三月。
 二〇一五年度「県南地域づくりキャンパス事業 美波町文化財調査報告会 講
 演資料 二〇一五年八月。
 吉本哲郎『地元学をはじめよう』 岩波書店(岩波ジュニア新書) 二〇〇八

年一月。
 井口貢『観光文化と地元学』 古今書院 二〇一一年八月。
 須藤茂樹「阿波学」序説―「地元学」「地域学」から考える阿波の魅力― 『ブ
 ロジェクト方式による学際的・総合的研究―阿波学事始め 地元学・ふるさ
 と再発見 研究成果報告書』 四国大学 二〇一五年三月。

【付記】

本稿は、二〇一四年八月一日(金)に四国大学古川キャンパスN二〇九
 (多目的教室)で開催された二〇一四年度「地域がキャンパス推進事業
 日和佐文化財調査報告会」で講演した「地域まるごと博物館の構想―美波
 町への提言―、及び二〇一五年八月一日(土)に美波町日和佐公民館三
 階大集会室で開催された「地域がキャンパス推進事業 日和佐文化財調査
 報告会」で講演した「文化財でまちを元気に―地元学・まるごと博物館と
 いう考え方―」の内容を原稿化したものである。

(本学文学部日本文学科日本文化史・博物館学研究室 准教授)